

=== T A C S 情報 第8号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和8年7月14日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、19.5℃（対平年差+2.0℃）と平年に比べかなり高かった。

6月の平均気温は、22.4℃（同+1.0℃）と平年に比べ高かった。

7月上旬の平均気温は、24.9℃（同+0.7℃）と平年並であった。

(2) 降水量

5月の降水量は、89.0mm（対平年比72%）と平年並であった。

6月の降水量は、129.5mm（同75%）と平年並であった。

7月上旬の降水量は、59.5mm（同64%）と平年並であった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、21.2MJ/m²/日（対平年比115%）と平年に比べかなり多かった。

6月の平均全天日射量は、19.0MJ/m²/日（同110%）と平年に比べ多かった。

7月上旬の平均全天日射量は、19.3MJ/m²/日（同125%）と平年に比べ多かった。

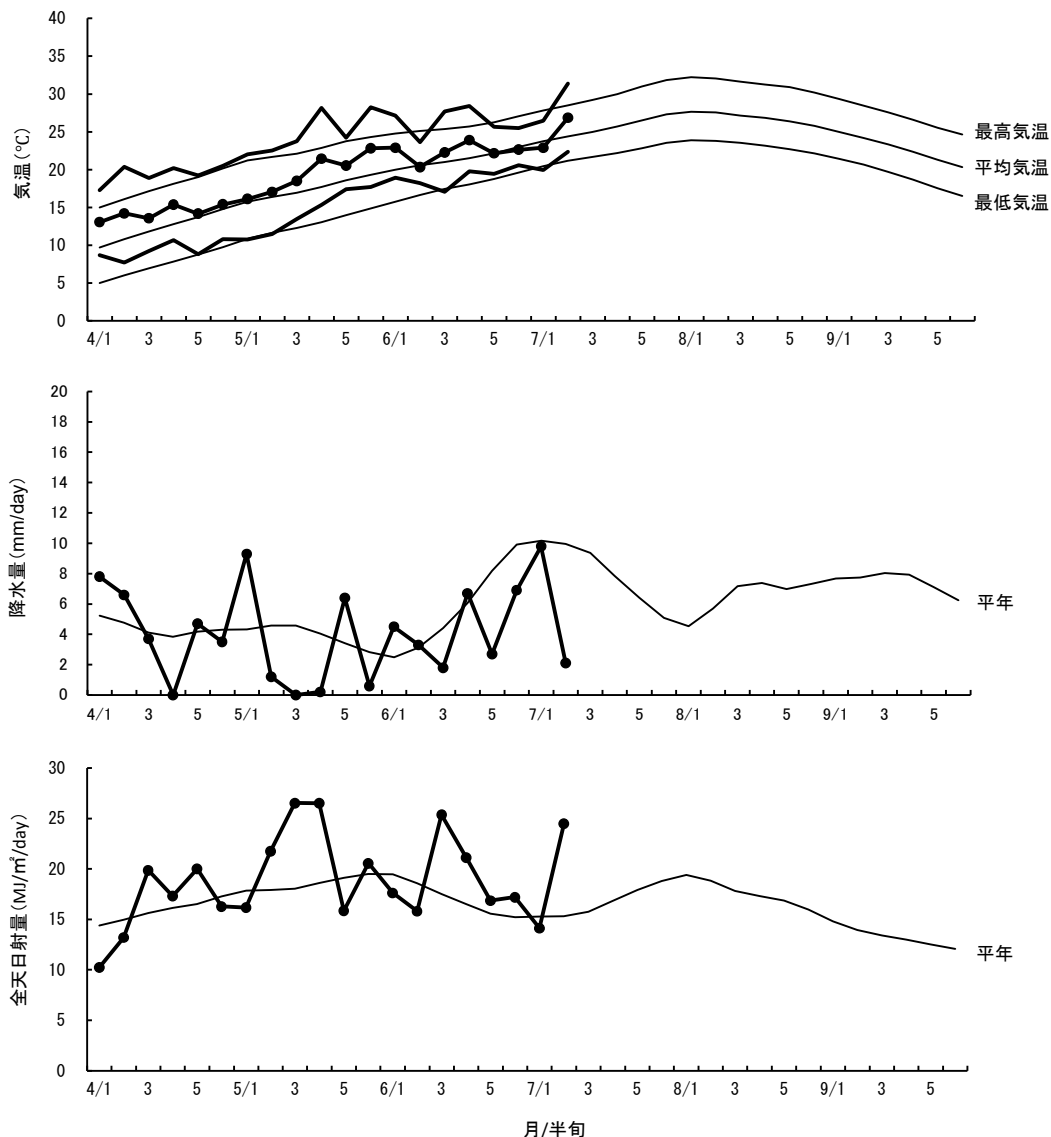


図1 令和8年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（１）富富富

近年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は淡く、葉齢は0.2葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、草丈は並、茎数はやや多く、葉色は淡くなっている。

幼穂形成期は、近年に比べ4日早い7月9日となった。

今後、近年並の気温で推移した場合、出穂期は近年に比べ4日早い7月31日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月14日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R8	5月17日	67.3	24.5	549	12.3	4.1	34.7	7月9日	(7月31日)
R7	5月17日	69.1	23.6	519	12.3	4.2	35.9	7月13日	8月5日
近年	5月15日	68.1	24.7	533	12.1	4.2	37.4	7月13日	8月4日
前年比・差	0	98	104	106	0.0	-0.1	-1.2	-4	(-5)
近年比・差	2	99	99	103	0.2	-0.1	-2.7	-4	(-4)

注1) 近年：H29～R7の平均

注2) R8の出穂期は推定値

注3) 調査地点10か所中3か所で7月14日までに追肥を施用

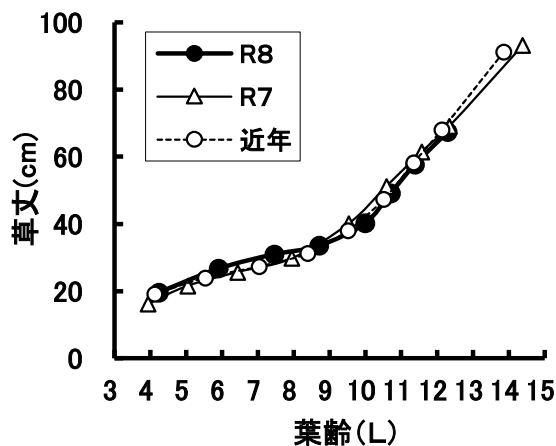


図2 草丈の推移（生観富富富）

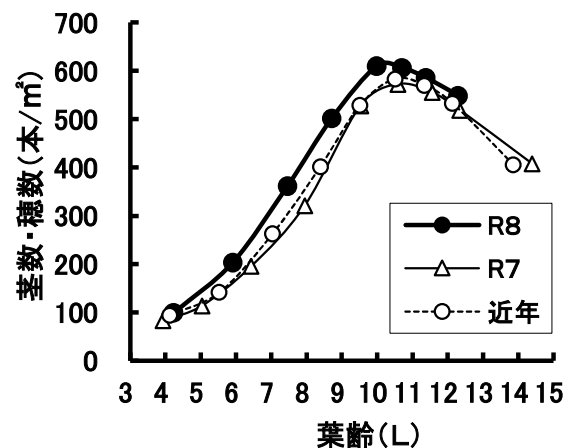


図3 茎数の推移（生観富富富）

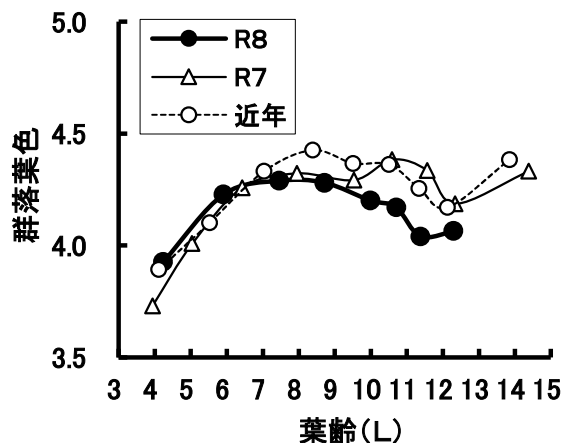


図4 葉色の推移（生観富富富）

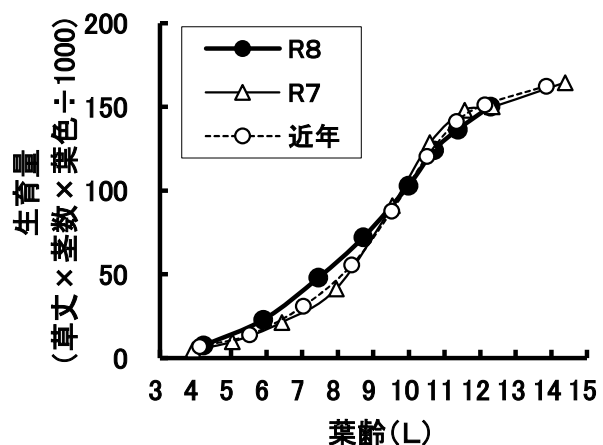


図5 生育量の推移（生観富富富）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は淡く、葉齢は0.4葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、草丈は並、茎数はやや多く、葉色は淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ5日早い7月6日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ5日早い7月27日頃と見込まれる。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（7月14日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R8	5月13日	79.7	23.6	503	13.0	3.9	31.4	7月6日	(7月27日)
R7	5月13日	80.2	21.5	477	12.9	4.0	30.8	7月10日	7月31日
平年	5月14日	78.0	22.4	489	12.6	4.0	33.6	7月11日	8月1日
前年比・差	0	99	109	106	0.1	-0.1	0.6	-4	(-4)
平年比・差	-1	102	105	103	0.4	-0.1	-2.2	-5	(-5)

注1) 平年：H28～R7の平均

注2) R8の出穂期は推定値

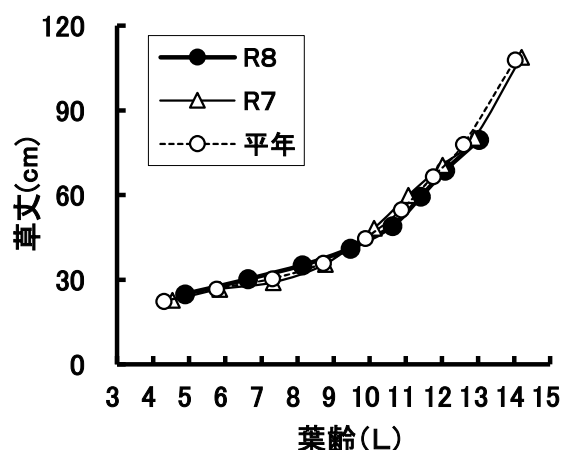


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

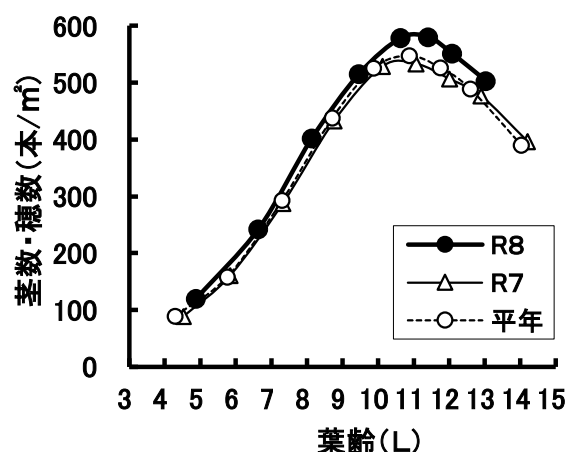


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

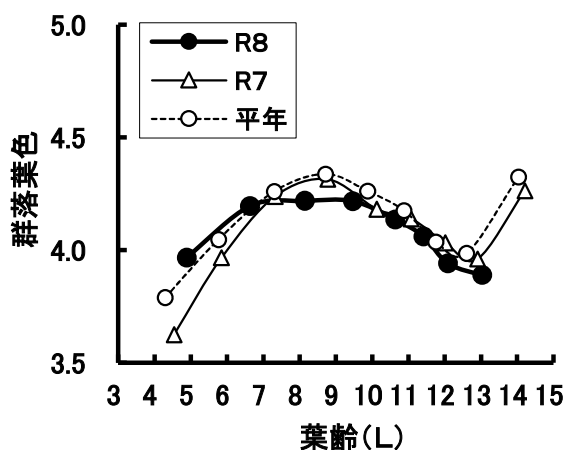


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

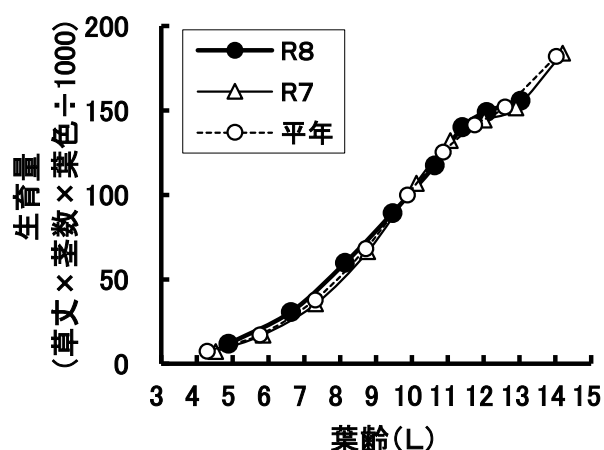


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんこもり

平年に比べ、草丈、茎数、葉色は並、葉齢は0.3葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、草丈、茎数、葉色は平年並となっている。

幼穂形成期は、平年に比べ5日早い7月7日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ5日早い7月29日頃と見込まれる。

表3 「てんこもり」の生育状況（7月14日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R8	5月9日	72.6	31.3	617	14.0	4.1	35.1	7月7日	(7月29日)
R7	5月12日	67.9	32.0	625	13.7	4.2	34.1	7月14日	8月5日
平年	5月9日	69.6	31.8	608	13.7	4.1	35.6	7月12日	8月3日
前年比・差	-3	107	98	99	0.3	-0.1	1.0	-7	(-7)
平年比・差	0	104	98	101	0.3	0.0	-0.5	-5	(-5)

注1) 平年：H28～R7の平均

注2) R8の出穂期は推定値

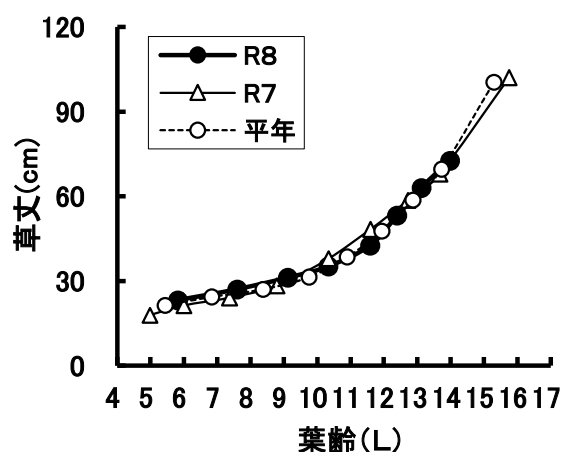


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

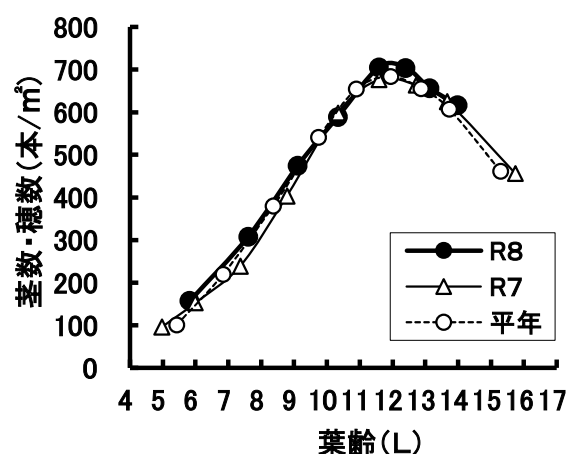


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

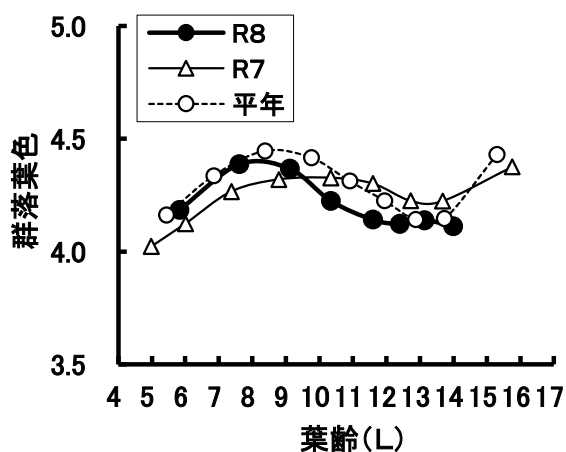


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

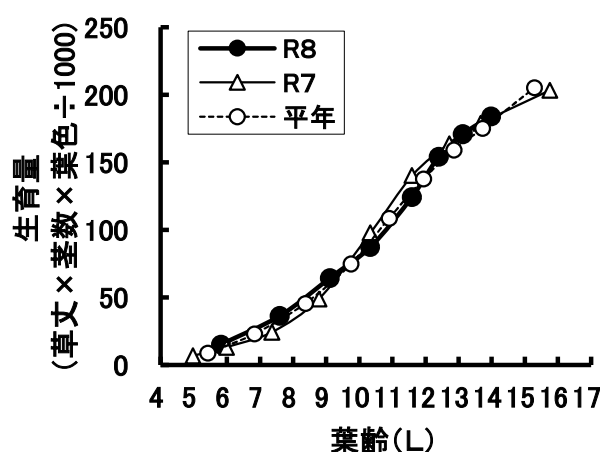


図13 生育量の推移（生観てんこもり）

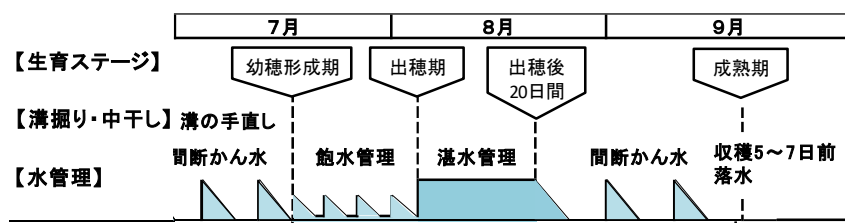
3 当面の技術対策

- ・ 今後、高温が予報されていることから、稲体の活力を維持するため、幼穂形成期から出穂期までは飽水管理を確実に行う。
- ・ 現在、葉色が淡くなっていることから、肥効調節型基肥栽培では葉色診断に基づき追加穂肥を積極的に施用する。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・ いずれの品種も出穂の早期化が見込まれることに加え、斑点米カメムシ類が多発しているため、防除は遅れずに実施する。

(1) 水管理

- ・ 今後、高温が予報されていることから、肥料の吸収効率を高めて稲体活力を維持するため、出穂期までは飽水管理(足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持)を確実に行う。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水状態を保ち、登熟期間の葉色を維持する。
- ・ 出穂後 20 日間の湛水後、刈取り 5 ～ 7 日前までは間断かん水を行い、胴割米の発生を防止する。

<今後の水管理のイメージ>



今後の水管理のポイント

- ① 出穂期まで : 稲体活力維持のため飽水管理
- ② 出穂後 20 日間 : 葉色維持と稲体温度を下げるため湛水管理
- ③ 刈取り 5 日前頃まで : 胴割れ防止のため間断かん水

(2) 肥効調節型基肥栽培における追肥対応

ア 「富富富」

- ・ 現在、平年に比べ葉色が淡くなっていることから(図 14)、葉色診断に基づき積極的に追加穂肥を施用し、目標の穂揃期の生育に誘導する(表 4)。
- ・ 本年は茎数過多により、葉色がかなり淡いほ場が多くなっている。今後も高温が見込まれることから、幼穂形成期の茎数が 600 本/㎡以上と多く、現時点で群落葉色が 4.0 未満と淡い場合は、直ちに窒素成分で 1.0kg/10a 程度施用する。
- ・ また、幼穂形成期後 14 日(出穂前 7 日)頃の群落葉色が 4.2 (SPAD32) 以下の場合、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度施用する。

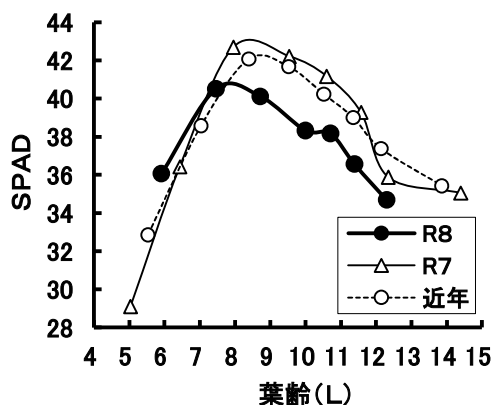


図 14 葉色の推移 (生観富富富)

表 4 穂揃期の生育の目安

草丈 (cm)	穂数 (本/㎡)	群落葉色	SPAD
90	400	35	4.4

イ 「コシヒカリ」

- ・現在、葉色がやや淡く、今後の高温が見込まれることから、葉色診断に基づき積極的に追加穂肥を施用し、目標の穂揃期葉色に誘導する。
- ・砂壤土では、幼穂形成期後 10 日頃（出穂前 12～10 日）または幼穂形成期後 14 日（出穂前 7 日）頃の葉色が淡い場合は、速やかに窒素成分で 1.0kg/10a を施用する（表 5）。
- ・砂壤土以外の土壌では、幼穂形成期後 14 日（出穂前 7 日）頃の葉色が淡い場合は、出穂 3 日前までに追加穂肥を窒素成分で 0.7～1.0kg/10a を施用する（表 5）。

表 5 「コシヒカリ」の肥効調節型基肥栽培における追加穂肥の目安

土壌タイプ	葉色診断基準		追加穂肥		目標の穂揃期葉色
	幼穂形成期後10日 (出穂前12～10日)	幼穂形成期後14日 (出穂前7日)	施用量 (kg/10a)	施用時期	
砂壤土	群落葉色4.0以下 SPAD32以下	群落葉色4.2以下 SPAD34以下	1.0	診断後速やかに (遅くとも出穂3日前まで)	群落葉色4.5 SPAD35
砂壤土以外	—	群落葉色4.0以下 SPAD32以下	0.7～1.0	出穂3日前まで	群落葉色4.2～4.5 SPAD32～35

砂壤土では、早期に葉色が低下している場合は早めに追肥する

ウ 「てんこもり」の管理

- ・幼穂形成期以降に葉色が 4.0（砂壤土は 4.2）を下回らないよう、葉色が淡いほ場では出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行う。

(3) 作業計画の前倒し

- ・いずれの品種も生育が早くなっており、出穂期及び成熟期が早まると見込まれることから（表 6）、追肥、防除及び刈取りの計画を前倒しにするよう作業計画の見直しを行う。
- ・本田防除では遅れずに薬剤散布を実施する。
- ・刈取始期が早生品種を中心に近年よりもかなり早まると見込まれるため、胴割米の発生防止に向け、共同乾燥調製施設等の利用計画を見直し、適期に刈取りが実施できるよう準備を進める。

表 6 各品種の生育ステージ（R8 生育観測ほ）

品種	生育ステージ(月日)				平年の出穂期との差
	田植日	幼穂形成期	出穂期	成熟期	
てんたかく	4月29日	6月17日	7月9日	(8月13日)	6日早い
コシヒカリ	5月13日	7月6日	(7月27日)	(9月3日)	5日早い
富富富	5月17日	7月9日	(7月31日)	(9月9日)	4日早い
てんこもり	5月9日	7月7日	(7月29日)	(9月12日)	5日早い

注 1) 括弧書きの日付は推定値

注 2) 平年の出穂期：てんたかくは R2～7、コシヒカリは H28～R7、富富富は H30～R7、てんこもりは H28～R7 の平均

(4) 病虫害防除の徹底

ア 斑点米カメムシ類 7月9日注意報（第3号）発出

- ・カメムシ類の増殖を抑えるため、イネ科雑草が出穂しないように畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。やむを得ず穂が出ている雑草を刈る場合は、本田防除の直前に行く。
- ・早生品種の防除は、粉剤または液剤体系とし、穂揃期（出穂 3～5 日後頃）とその 7 日後の傾穂期の 2 回防除を徹底する（図 15）。
- ・「コシヒカリ」及び「てんこもり」等の中晩生品種は、穂揃期の防除を徹底する。
- ・近隣に雑草地や麦あとと不作付地等がある水田では、斑点米カメムシ類が侵入するおそれがあるので防除を徹底する。
- ・斑点米カメムシ類の多発地域や、基本防除後も発生がみられる場合は、使用時期、使用回数等の農薬使用基準を遵守し、追加防除を実施する（図 16）。

カメムシ防除	防除時期の目安	てんたかくなど 早生品種	コシヒカリ・富富富 晩生品種
1回目	出穂3～5日後頃 (穂揃期)	基本	基本
2回目	1回目の散布から 7日後頃(傾穂期)	基本	追加
3回目	2回目の散布から 7日後頃	追加	

図 15 防除時期と防除回数の目安

例年カメムシ類の発生密度が高い地域やクモヘリカメムシ等の大型カメムシの発生が多い地域は追加防除を実施

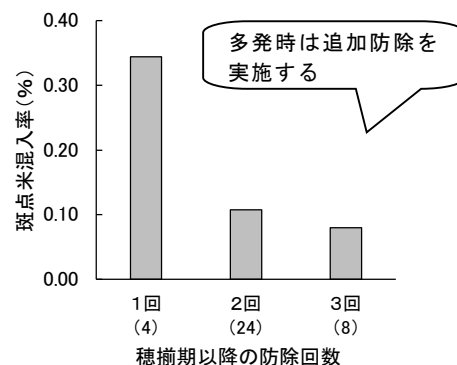


図 16 斑点米カメムシ類多発年の防除回数と斑点米混入率
(R7 早生登熟状況調査：中央部)
※ () 調査点数

イ 紋枯病（紋枯病の初発確認日 R8：6月18日、平年：7月3日）

- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表7）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・ 箱施薬剤と本田防除の 体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表 7 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 (発病株率)	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)
コシヒカリ・富富富	15%	出穂 10 日前頃
てんこもり	15%※	出穂 7 日前頃

※てんこもりの発病株率は追加防除の目安（暫定）

ウ いもち病（葉いもちの初発確認日 R8：7月7日、平年：7月9日）

- ・ 常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生を確認した場合、直ちに防除する。



BLASTAM情報
(葉いもち予測システム)
はこちらから

エ 稲こうじ病

- ・ 常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

オ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・ 稲体活力の低下により発生が助長されるため、適正な施肥や水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。